

農事組合法人 中園営農組合（国東市安岐町）

【経営の概要】

経営形態	生産組織（農事組合法人）
モデルの種類	中山間地モデル
設立時期	（総会）平成15年1月26日 （登記）平成15年2月12日
構成戸数	15戸
労働力	基幹2名、補助3名

【経営規模（ha）】

	経営面積	水 稻	麦 類		大 豆	その他 （野菜等）	作業受託 （水稻）
			小麦	裸麦			
平成19年	16.5	7.0	8.0	7.3	5.6	—	延べ2
平成20年	17.1	5.7	8.0	8.0	7.6	0.02	延べ2
平成21年	18.1	5.1	8.4	8.1	8.6	0.1	延べ2

【機械装備】

トラクター（34ps）	1台	遠赤外線乾燥機（43石）	1基
トラクター（55ps）	1台	遠赤外線乾燥機（40石）	1基
自脱型コンバイン	1台	遠赤外線乾燥機（30石）	2基
汎用コンバイン	1台		
田植機（6条）	1台		
ブームスプレイヤー	1台		

【経営の特徴】

平成15年2月 農事組合法人中園営農組合を設立し、米、麦、大豆経営を行う。
 平成15年3月 認定農業者に認定される。
 平成16年度 大分県豆類経営改善共励会で優秀賞を受賞。
 平成19年度 大分県麦作共励会で最優秀賞を受賞。
 平成19年度 全国麦作共励会で全国米麦改良協会長賞を受賞。
 平成20年11月 国東市栄誉章表彰を受賞。

【導入した新技術】

◎浅耕一工程播種技術（大豆）

（手法）

播種期が梅雨と重なる大豆作において、高水分条件で播種するための技術。事前の耕起をせず、浅く耕しながら同時に播種する浅耕一工程畦立播種を行った。

（結果）

毎年播種前に個別講習会を実施し、技術内容について指導を行った。

平成19、21年は播種時に降雨が多く、7月中に播種したもの <浅耕一工程実施状況>の湿害により出芽不良となり、播き直しを余儀なくされた。

平成20年は、適期に播種できたが、播種後に乾燥状態が続いたことで出芽不良となり、その後も乾燥により初期生育が抑制され、生育不良となった。

（留意点）

梅雨対策としては重要な技術であるので、土壌の水分状態とその後の天候を慎重に見極め、再度実施を検討する。

◎土壌分析に基づく土づくり資材の投入

(手法)

土壌改良を目的とした土壌分析を毎年実施し、その結果に基づき土づくり資材の施用を指導した。

(結果)

土壌分析の結果は、以下のとおり。

	pH	EC	可給態リン酸	陽イオン交換容量	交換性塩基		
					石灰	苦土	カリ
H19	5.9	0.04	23.8	12.4	6.8	1.8	1.1
H20	6.6	0.05	30.2	13.5	7.0	2.0	1.3
H21	6.8	0.04	9.8	12.0	8.4	1.5	1.1

ほぼ理想値に近い結果であった。物理性向上のため、堆肥投入を指導し、麦作前に施用した。

今後も土壌分析を基本として資材の施用を行う。

◎土壌分析に基づく緩効性肥料による省力型追肥（麦）

(手法)

追肥作業の省力化を目的とし、土壌分析をしたうえで緩効性肥料を使用する技術。

H19、20年度は、分けつ肥施用時に、分けつ肥～実肥まで効果のある麦専用追肥一発肥料、

H21年度は、基肥施用時に基肥～実肥まで効果のある醤油小麦専用一発肥料を施用した。

(結果)

各年とも土壌分析の結果（上述）、要素不足は見られなかったので、緩効性肥料を基準通り施用した。醤油用小麦は3回の追肥が必要であるが、緩効性肥料を用いることによって追肥作業が1回のみとなり、労働力の低減には効果的であった。

(留意点)

肥料価格が高価であるので、導入の際は慣行栽培の場合の経費との比較を慎重に行う必要がある。

◎シーディングロータリー＋培土板播種技術（麦）

(手法)

シーディングロータリー＋培土板で、耕起、肥料散布、播種（散播）を同時に行う技術を実施した。

実施に当たり、播種量、播種深度の調整等の技術指導を行った。作業の際は、管内麦生産者を集め研修会を実施し、シーディングロータリー技術の紹介と併せて中園営農組合の実施状況を組合長から説明し、モデル経営体として技術の普及を行った。（播種日：H19.12.12、H20.11.5、H21.11.5）

＜実演研修会＞

(結果)

H19年播種（20年産）は晩播となり、生育遅延が心配されたが概ね良好な生育であった。

H20、21年播種は適期よりやや早めに播種したが、出芽、生育は順調で、年内に踏圧を行った。1月初旬には追肥土入れを行い、適正管理を行った。

◎簡易培土板による播種同時溝上げ栽培技術（大豆）

(手法)

簡易培土板＋簡易畦立器による播種同時溝上げ技術を実施した。

(結果)

H19、21年は生育初期に降雨が多く、湿害対策である当技術の効果が大きかった。

単収は、H19 (230kg/10a)、H20 (293kg/10a)、H21 (270kg/10a) と安定して増加しており、当技術を実施する以前と比較すると、単収は100kg/10a以上も向上し、非常に大きな効果を上げている。梅雨時期の湿害対策として不可欠な技術であり、今後も継続実施する。

<簡易培土板>

<簡易畦立器>

<溝上げ播種後の良好な生育状況>

◎実肥同時防除技術（麦）

(手法)

赤カビ病防除と実肥の葉面散布を同時に行い、省力化と併せて品質向上を図った。

(結果)

今までは、2回の赤カビ病防除とは別に実肥を施用していたが、新技術導入により、実肥施用を赤カビ病防除と同時に行ったため、労力が低減され、コスト低下に結びつくとともに適期作業が可能となった。特に大規模経営での導入に効果的である。

<ブームスプレーによる実肥同時防除>

◎その他特徴的な取組

園芸品目の導入：労働力の有効活用、地域活性化のため、野菜（ゴーヤ等）の栽培に取り組んでいる（H21：10a）

◎主な波及活動

- ・東部振興局管内の麦作農家を集めての麦播種前研修会にて、導入技術の成果発表、並びに技術の実演を行い、モデル経営体として技術の普及を行った。（研修会実施日：H19.12.12、H20.11.5、H21.11.15）
- ・モデル経営体意見交換会にて実践技術の実績等意見交換を行い、地域の担い手へ普及を行った。
- ・東部振興局管内の集落営農組織を集めての集落営農法人リーダー養成講座にて、経営状況の発表を行い、法人化の波及活動を行った。（実施日：H21.12.10）

【経営状況】

(10aあたり)

	労働時間(県平均比)	全算入生産費(県平均比)	所得
経営全体	13hr (62%)	69,055円 (73%)	3万円程度
水稲	32.3hr (102%)	98,781円 (67%)	
麦	8.9hr (96%)	62,704円 (112%)	
大豆	9.1hr (56%)	60,912円 (103%)	